

「探究学習・調べる学習ひろば」参加者のコメントから_2

4月26日(土)21:00~22:30に実施された「探究学習・調べる学習ひろば」の第2回では43名が参加、そのうち事後のアンケートに15名が回答してくださった(青文字)。以下抜粋引用するとともに、簡単な回答・コメントを記します(※…片岡 / ★…山崎)。

また、リスナーから希望が多かったアーカイブ配信も始めました。Googleアカウントをお持ちの方限定ですが、リンク先のGoogleDriveから視聴&資料が読めます。→([アーカイブ配信/資料置き場](#))

歴史小説は参考文献になるか / 先行研究の調査はどこまで求めるべきか

いろんな生徒さんたちの話が聞いて楽しかったです。歴史への興味は、ゲームや漫画や大河ドラマがきっかけになるのが多いのかと思いましたが、城郭や邪馬台国が上がってくるあたり、そればかりでもないのですね。歴史小説は意外とヒントになるような記述があるような気もしますが、論文の参考文献には使えないですかね。

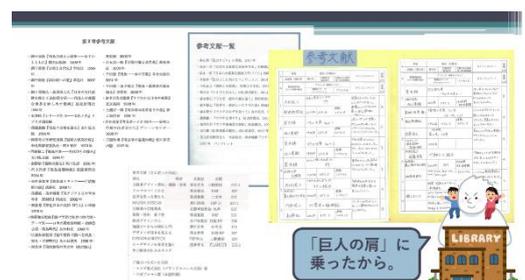
質問ですが、歴史研究に限らず、論文では最初に執筆動機として「ここまで明らかになってきたが、まだこういうことがわかっていない(本論はその研究である)」というような、研究史を整理する部分があると思うのですが、清教学園の論文ではそういう先行研究の整理は求めているのですか？(学校司書モデルカリキュラム受講生)

※なにせ中学生ですから、「巨人の肩に乗る」わけにはまいりません。膝とか肘くらいまで登って、「まだまだ登らないといけないけど面白かったよ」と言えれば御の字でしょうか(高校や大学生とて事情はそんなに変わらないかも)。とにかく登ってさらに遠くが眺められる、次の山の頂が見える「世の中学ぶことがまだまだあるな!」と思えるような経験が大事かなと。なんか文学的?ですみません。

★現在はゲームやマンガきっかけよりも、「ガチ」の歴史好き生徒が多いですね。特に本校では、卒業研究のフォーマットが論文になってからその傾向がある気がしてます。ポップカルチャーがきっかけの歴史研究は、むしろポップカルチャー研究に移行するのかも?小説もゲームや漫画と同様、研究の入り口としてはいいのだと思いますが、あくまで動機やきっかけかと。その先の研究を進めていく上では、やはりノンフィクションにあたる必要がありますね。

>清教学園では先行研究の整理は求めているのですか?

これについては、先行研究を論文で読んで…みたいな整理は難しいです。フィールドワークを実施する前に、一般書で書かれてあることくらいはちゃんとわかってね、といったレベルの整理は求めています。2024年度中3生の参考文献冊数は平均11.2冊、通読図書冊数は5.8冊でした。論文風レポートくらいのもを書くならこれくらいの冊数でいけるという



ことですね(設問の上限が「20冊以上」だったので、多分もう少し数値は上がりますが)また、生徒自身が誰も解明していない未知の結論を求められれば、それはすごいことですが、そこまでいくのは中高生には求めすぎかと。「みんながもう知ってること研究してどうすんの」とは言いますが、「色々頑張っ
て、やっと大学1回生の内容に辿り着いたね」くらいが、中高生の探究では丁度いい塩梅です。1年間勉強した結果、自分にとっての未知が明らかになった、くらいでいいのかと。そこにオリジナリティあるフィールドワークができていれば御の字です。

清教学園「探究科」の経緯 / 専科スタッフがいる利点

楽しくてためになるお話をありがとうございました。貴校のHPを拝見した時、探究科教諭という肩書きで書かれていたのですが、貴校には科としてあるのでしょうか。そうだとしたら、探究科が存在することで、通常の探究授業の形態(担当教諭を図書館がサポートする)との違いや利点を伺いたいです。(中学校高等学校司書教諭)

※山崎さんがしっかり書いてくれていますのでそちらに譲りますが、「人海戦術」について少し。人海戦術も並列でできたら素敵だなと。以前京都の堀川高校を拝見した時に、京大の院生がけっこう来ていて、そうした斜め上のアネキ・アニキの影響力大きそうでした。なんだろう、何か教える人がいるというより、「あんな人になりたいな」というロールモデルが生徒の研究を駆動するような気がします。清教学園でも部分的に導入してますが資料費とともにお金の使いどころだと思います。

★そのあたり、正式な名称や肩書と言っているのか怪しいので、経緯を述べます。「探究科」は片岡先生が赴任された18年前に、関西学院大学との連携コースとして創設されました。高校2・3年の2年間、それぞれ2単位の授業にて、4万字の論文を書いて推薦で関学に行きましょう、というコースです。1学年あたり40名~80名(1~2クラス)でした(>片岡Tでしたっけ?→※そうです)。片岡先生も本校在籍時の肩書は「探究科教諭」を名乗りました。しかし8年前に関学との提携が解消され、高校のコースとしての「探究科」は廃止されました。

これに対して、同時期につくられた中学の分掌「総合学習運営委員会」もまた、図書館スタッフによる探究学習担当・カリキュラム構築を行ってきました。名称は違えど、中学生相手に「探究科」をやってきたのが実態です。加えて、高校探究科の廃止と同時に、高校探究科で扱っていた論文のカリキュラムを、山崎と片岡先生とで中学生向けに改訂しておろしてきました。ここで中学の探究学習は「論文化」しました。そうした実態や、片岡先生の仕事を引き継ぎたかったこと、その他校内の事情などを鑑みて、数年前から「探究科」を名乗ることにしました。組織としての「立ち回り」の一環ですね。ですので、質問へのお答えとしては「科目としての位置づけはないが、実態は科目として機能している。働いている人間も『探究科教諭』として機能している」というのが正しいかなと。ちなみに山崎は授業を担当しているので教諭を名乗っていますが、採用は事務職員です(つまり仕事内容は専任司書教諭だけど、採用枠は学校司書)。

利点はまさに、司書や司書教諭が授業を担当することで、探究学習と図書館が直接つながることです。分掌や教科に近い組織なので、教育観も近いです。他校でも個人で論文を書くような学校は増えていますが、多くの場合は大学院生によるTAや大学教員を招聘するなど、人脈と人海戦術で論文を書くカリキュラムを作っています。学校図書館が機能していて、本と生徒を繋ぐ誰かがいれば、そのような

体制はそれほど必要ないと考えます。本を読めば生徒のテーマは深まるし、本が彼らにとっての先生になるからです。(実質的に)「探究科」教諭として働く我々の専門性は、おそらく生徒のそうした「独学」をサポートできる点にあるのかと。レファレンスやその他もろもろで。

歴史探究の苦戦と参考文献 / 創作活動系の探究学習の事例

今日も開催頂き、ありがとうございました。歴史の類は量がありますね。伝記漫画以外は授業でもないとうちも貸出は動きません。やはり好きだと自分で買って持ってる子が多いからでしょうか。探究では三国志、戦争をテーマにしたのはやはり男子でした。三国志はゲーム発で資料として読む事に苦戦していました。平凡社の、もっと使おうと思います。大河ドラマ発では、十二単を扱おうとしている生徒がいます。夏休み家族旅行で京都へ行く計画をしているそうなので、せっかく行くなら実りあるものにして欲しいと勝手にそわそわしてます。市立さんから資料を送ってもらったり、購入したりで、本当に司書も勉強させて貰ってるなあと感じます。徐々に探究に沿った蔵書へ変容してきている様子もビフォーアフターを撮っておけば良かったと思うくらいです。建築(リノベ、リフォーム)とダンス、ペットボトルロケットなど、創作活動系の探究で何か参考になるものあれば教えていただきたいです。本校は成果物は今のところ、探究の要旨集のみです。(埼玉中学校司書)

※「三国志演義と三国時代の違いをはじめにわかってね」と言ったりしますね。文学9類と歴史2類の棚の違いですね。どっちも大変ですけど。京都よい旅行になるといいですね。学芸員さんか研究者を名指しで取材できたらいいかもしれません。「あなたの論文を読んであなたにお会いしたいのです」といわれれば断る方はそういないとおもいます。

「探究に沿った蔵書」！ 成長する有機体ですねえ。清教学園もはじめはバレエの本がわずかしなくて、いまはずいぶん増えました。子どもの需要で育つ本棚は、時間はかかりますがゆっくり効いてくれると思います。そうした蔵書が題材決定の呼び水にもなっているのかも。

本格的な創作系うちでももっとやらせたいですね。論文にどうしたって引っ張られます。実験・調理・工学系は山崎さんが書いているように実例はもちろいろいろあるんですが。芸術系の創作とそのプロセスレポートみたいな、芸術系大学でやっている手法を学んでみてもいいかもと思いつきました。以前茨城の茗溪学園の課題研究では芸術系の先生がそんな指導をされていました。

★歴史好き、どの学校にもいるんですね。動機(ゲームなのか歴史漫画か「ガチの歴史好き」か)に照らすと、その先探究学習できるか否かが分かれてくるのはさもありなんという感じです。最後まで歴史でやる生徒は、平凡社の世界大百科事典くらいは平気で読めてしまいます。平凡社が読めるかどうか、バロメーターかもしれませんね。

「創作活動系」について。本校の論文は「文献調査+フィールドワーク」で構成されています。全員が必ず本を参考に理論を学ぶことに加えて、必ず何らかのフィールドワーク(実験・観察・社会調査等)を行います。学術の定義とは異なりますが、「自分で何かやってみる」学びの総称が、本校で定義するところの「フィールドワーク」です。そのフィールドワークの一環で、仰るような「創作活動系」をすることが多いです。例えば西洋絵画について学んだ生徒が、実際にとある西洋画家の手法で絵を描いたり。自作PCについて学んだ生徒が、安くて速くて高性能な自作PCを組んでみたり。色々あります。そうしたフィールドワークも、論文の第〇章に組み込まれ、結論を求めていく上での重要な根拠として機能します。本当に色々ありますよ。料理、動画制作、ゲーム制作、ボーカロイド作曲、プログラミングでAIを動かす…。

中3は研究方法2種を同時進行



社会に出てフィールドワーク



専門家に取材 / 社会調査 / 実験 / 観察 / ものづくり
うたってみた / おどってみた / つくってみた … etc.

無駄な勉強の大切さ / 面談テクニック / 探究カリキュラム体制の経緯

本日もありがとうございました。前回は初回にも拘らず途中からの参加になってしまい、話の流れがよくわかっていなかったのですが、今回は最初から最後まで聞くことができ良かったです。是非第1回目もPodcast等で配信していただけるとありがたいです。また、第1回目の質問にも大変熱量のあるコメント返しをしていただきありがとうございました。他の方の質問も見つつ大変参考になりました。

本校の探究科がはじまり5年目、カリキュラムの見直しと改訂をすすめている今年度なのですが、高校の2年間で「無駄な勉強」をするだけのカリキュラムを組めるのか、そのためには今やっているアンケート調査やインタビュー調査といったある種フレームワーク的单元とどちらがあったほうがいいのか…今日の話にもありましたが、「問い」の設定を重視している現状もあり、「コスパのいい学び」のくだりに少しギクリとした気持ちもありました。カリキュラムづくりが難しいなとしみじみ実感しています。「知識もないのに「問い」やら「テーマ」「ポスター」「スライド」に突き進むと、興味も関心もないアライバイ作り探究(探究させられ学習)になってしまう」これにもギクリ……という気持ちです。

本校は2020年から探究科が始まり、現在専任1名+講師1名で5学年を見ているのですが、レファレンスやカリキュラムの構想は1人でまかなっている状態で、いまいち独り相撲のような、レファレンスや生徒のテーマ設定の面談もなかなか追いついてないような…という手探り感が抜けず、悩んでいます。FWや本をたくさん読む、など、リブラリアの環境や授業に関わるスタッフの人数など十分な環境があって成り立っているのかな、という感想を抱いたのですが、どのように清教学園の総合・探究カリキュラムや体制が出来上がったのか(思想や構想など)、どのように現在の環境が出来上がったのかなど、どこかで資料が公開されていたら教えていただけると幸いです。

面談テクニックは、現在、毎日授業で生徒とテーマ設定の面談をするたびに「これで良かったのか?」「本当にピンと来ているのか?」「生徒の反応が投げやりすぎないか?」「そもそも授業内の時間が足りなくて私も真剣に向き合えてないのでは…」と頭を悩ませているところです。

面談テクニックの共有、心待ちにしております。

先生方のご無理のない範囲で、質問返しが続くと嬉しいです。ちなみに、今回は事前に配布資料をメールでいただいたのですが、第1回目の時の犬猫の資料はメール配信をされていたでしょうか?もし見落としてしまっていたら申し訳ありません。

本日は歴史がテーマでしたが、お三方の話を聞いたり資料を拝見していて、本校には歴史をテーマにする生徒が5年間で1人いたかどうか…ということに気がきました(「兵糧丸は本当に腹持ちがいいのか」等)。逆に、恋愛や睡眠、心理学や音楽がやたらと多く、こういったテーマの傾向はもしかしたら学校ごとに違うのかも?と思って少し面白かったです。前回のコメント返しにもあったやめとき系テーマをやる子が多く、これまで本校では「なんでもいいから興味のあること自由に取り組み」で進めていたからかもしれません。

「現代のピラミッド好きはどのような点に興味を持っているのか」の調査がどのように行われたのか気になりました。本校でも似たようなテーマで「ディズニーパレードの魅力とは」「邦ロックを聞く人は何を求めて聴いているのか」と言ったようなテーマを設定しようかと考えている生徒がいるのですが、魅力に感じる点は人それぞれであること、調査手法がいまいち不透明であること、最後は主観であり客観的根拠はできないのでは…と思うと、「とりあえず好きにやらせよう」という気持ちと、「これでいいのだろうか…」という気持ちがあります。

「真田幸村とは? : 真田幸村はどのような人物だったのか」は最終的にどのような取り組みになったのでしょうか?タイトルだけ見ると、自分の生徒が持ってきたときに「偉人伝とかまとめて終わりにならない?」と言ってしまいそうだなと思ってしまいました。

長々と書いてしまいましたが、今回もありがとうございました。引きつづき楽しみにしております。(中高司書/司書教諭/探究科教員(正規))

※「無駄な勉強」の良さは終わってみるとわかるので、アンケートを取って自由に感想を書かせてみてください。きっと自分の題材やテーマとの格闘がいかによい道りだったのかを書き残してくれるはずだからです。アンケート調査やインタビュー調査いいではないですか。大切なはその調査を「生徒自身がイニシアティブをもって決めて踏みだしているか」という一点です。そこが「探究学習」と「探究させられ学習」の境目で、小さいように見えても、学びが発生する状況が全く異なるのです。生徒は自分で踏み出すまでにあれこれ逡巡したり、“コスパよく”抜け道を探したりしてじたばたしますが、そうした足踏みや勘違いもまたあとから大事な道りと気づいてくれるのではないのでしょうか。

私も1988年ごろに神奈川県立厚木商業で探究学習(大航海)を始めた頃は一人相撲でした。一人相撲というのは孤独で自分で責任を負っているいろいろなやれるので逃げ場がなく緊張感もありますが結果的に良かったと思います。性格的に、指図されるのが嫌いなせいかもしれません(‘◇’)。

面談はどうせ全員出来ないのが希望者だけでもいいかもしれません。相手が面談したい時がいいタイミングですから、授業でのアンケート調査で希望者をつのりその生徒を授業中に面談するのが第一。次に授業中に何気に声をかけてきた生徒が第二。放課後きたいというあ生徒がいるようなら空いている時

間の表を作って記名させるのが第三です。いずれにせよ生徒は自分で自分が納得できる題材を選んできます。提出期限が近づくと「なんとかなるやろ」といってさぼる生徒もいるものですが、個別に何かいうよりは全体に失敗例を解説しています。そのあたりも「なんとかなるやろウイルスの話」として、テキストに。

探究学習のカリキュラムが成立した経緯については、中学なんでやねんの前身の高校での「タラント」の話をしていけません。こっちは8年やっていますが、まとめた冊子がありますが…。山崎さんのコメントに構成主義とありますが、さらにその根っこは児童（人間）中心主義です。語ればなが〜い(◇)

★>Podcast 等で配信

資料をおいておく場所も欲しかったので、GoogleDriveで共有する形にしてみました。第1回も配信中です。柏原さんから連絡が来ていると思いますので、ぜひぜひ！（→[アーカイブ配信/資料置き場](#)）

>無駄な勉強をするだけの～

これについては、個々の先生方の裁量だけでないのが難しいですね。色んな学校の実践をみてきましたが、決め手となるのはカリキュラムマネジメントなのだと思います。学校として何を大事にするのかで、無駄な勉強とか、それをやるための時間や単位というものは確保されていくのだと。どこも「ギリギリ」とされる話題だとは思いますが。でも、1単位・1年半を生徒にあげるって、そんなに難しい話ではないと思うんですけどね。やはり「教えたい」「進めたい」「管理したい」欲求があるのだと思います。学校教育者には。

>どのように現在の環境ができたか

教育思想や構想については片岡先生の構成主義的な教育観が清教学園で根を張ったのだと思います。僕も20代から一緒に働き始めましたが、その影響が大きいですね。組織としても、そうした教育観にシンパシーを感じている人が残ってきた感じです。

>面談テクニック

本校の場合、①進捗アンケートで文書にてレファ&研究アドバイスする ②直接対面でレファ&研究アドバイスする の2展開です。①の方は、ひょっとしたら他の先生方にも手伝ってもらえるかも？司書教諭としての先生のアドバイスを見れば、ほかの先生も見よう見真似でやってくれるかもしれません。テクニックはレファレンスなのか研究のアドバイスなのか、生徒のテーマ設定の状況がどうなのか、といった点によって一概にお伝え出来ないのが難しいですね。他の方の質問にもあったので、進捗アンケートのアドバイスは個人情報マスクして公開できるようにしてみます。まあそれにしても「正解」はないですよ。僕らも三者三様です。

>ピラミッド好き

ピラミッド好きにインタビューして、それを類型化したような…

>魅力を感じる点

「魅力語りは研究にならん」とは言ってるので、そのあたり実際難しさはあります。とはいえ、「世の人々が何を魅力におもっているのか」それ自体は個人的・相対的な世界に見えて、調査すれば何らかの法則性が見えてくる可能性はあります。属性間比較や、質的調査によって何か明らかになればいいですね。たいがいつまんないデータになりますが…笑 「つまんないデータしか出てこないと思うよ」とかはポロっと言ったりしますね。

>真田幸村

恐らく論文化する前、調べる学習時代の成果物ですね。仰る通り「偉人伝まとめおわり」だったんじゃないかなあ。そういう作品も昔は多かったです(今も「論文風偉人伝まとめ」ありますが)。論文を成果物のフォーマットにすることの意味は、このあたりのハードルが上がる点にもありますね。

フィールドワークの失敗談 / 古い歴史分野資料の廃棄基準

問いかけのテクニックはレファレンスインタビューにも通ずるものがあるなあと感じました。後半の「歴史」をテーマにした探究学習の話の中で、フィールドワークで専門家に取材した生徒さんもおられたとのこと。取材をきっかけに探究学習への取り組みや論文作成のモチベーションが上がった生徒さんもいたのではと感じました。歴史にかぎらず探究学習を指導される中で、失敗談・まずかったことなどもあればぜひ拝聴したいです。あと日本史の分野で学説が変わったりしているものがありますが、ここ近年、出版社も昔出版していたようなシリーズものや、大きな事典や図説などを出さなく(出せなく)なり、学説は変わったが資料としてまだ使え(そうな)るものの取り扱いをどのようにされているか(廃棄? 書庫へ移動? など)お伺いしたいです。(高校学校司書)

※問い掛けはたしかにレファレンスインタビュー的ですが、カウンセリングの影響が濃いです。片岡が影響を受けた先達にカール・ロージアズがいて、彼の本をずいぶん読んでいましたから。かれはよく知られているようにカウンセリングの開祖的な方ですが、教育についてもいろいろ著作を残しています。機会があればそんなお話も…。

そうなんです。取材が決まってから学びが本物になる場合が多いんです。そこからちゃんと資料を読むようになったり。だから取材ができた生徒の論文はほぼほぼうまくいきます。

失敗談いっぱいあります。テキストの何ページかにまとまっています。いま引っ越しの最中で手元にテキストがなくて…山崎さんどこだっけ?

学説が変わったところまで蔵書として追いかけているかどうか、ごめんなさいはっきりしません。でも昨年の邪馬台国のテーマの生徒は最新の情報読んでたような。古い学説も「以前はこうだった」とう資料でもあり、廃棄はそんなにしてないような? 鎌倉幕府が1192年の本はまだあるのでは?

★>失敗談・まずかったこと

いっぱいありますよ 笑 といっって、笑えるのは今はこうやって思い出しているからですね。トラブル対応しているその場は大変でした…笑 ほんの一部ですが、こちらをご覧ください→[\(授業テキスト\)](#)PDFの第4章、70ページからがフィールドワークで、p.101に「インタビュートラブルコレクション」というタイトルのページがあります。授業者からするとほとんどホラーなので、心してお読みください…。かなり丁寧に指導していますが、それでもこういうトラブルは毎年数名出てきます。一緒に謝るしかないですね。

>まだ使えそうな資料の扱い

その廃棄基準は厳密でなく、気になる資料はつどスタッフで相談して廃棄を決めます。仰る通り、使える部分はあるんですよね。類書がないとか、いろんな理由でそのままおいてるケースはあります。

なんで「卒業論文『なんでやねん』」やねん?

楽しく拝聴しています。ありがとうございます。読書家の時間でも、歴史好きはなかなか癖が強く、他ジャンルの本は読みたがらない、話を聞いても一体歴史上の人物やモノのどんなことが知りたく

て何が読みたいのか聞き取りに苦労します。(歴史は好きだが歴史小説は嫌い、学術的なものは難解過ぎて読めない、怪しい俗説や小説として描かれているものを信じているなど…。)

前から少し気になっているのですが…「なんでやねん」は問いや疑問ではなくてツッコミの言葉(反語的用法、否定)なので、探究学習における「問い」を指すのなら「なんでなん?」の方がふさわしいのでは?と思ったみたり…知らんけど…^^;(中高非常勤・国語)

※クセが強いといいですね〜。俗説も多いですよ義経がジンギスカンになったとか?それはそれで何をしていいかわからない生徒よりとっかかりがたくさんあるので安心かも…?

「なんでなん?」なるほど…。ネイティブの方に言われるとそんな気が('◇')。 「なんでやねん」は異議申し立てなのかなと。学問はすべからず批判の上で成り立ってこそなので、本来は違和感、納得いかなさがスタートになって欲しいという期待を込めている…そんな「なんでやねん」スピリットがあったら素敵かなあと。ちなみに「なんで子どもたちは自分の興味で学べへんの?」が私の「なんでやねん」です。

★この質問(というかツッコミ)は授業的にも重要な観点です。 「世の中の違和感にツッコミ入れろ!」がネーミングのコンセプトなのですが、探究学習における「問い」は「なんでなん?」以外にも色々あるのです。例えば「この状況おかしいやろ、あかんやろ、どないなっとなねん」的なものなども含まれます。世の研究論文の多くがそうであるように、「問い」「疑問」があれば「反語的作用」もあると。最終的な問い(タイトル)はともかく、動機の部分では「なんでやねん!」も多いですね。公開しているテキスト→[\(授業テキスト\)](#) p.15 に、「なぜ卒業論文は『なんでやねん』なのか」というタイトルのページがあるのでご覧ください。いや、言語学的な正しさはさておき…笑

なぜ卒業論文は「なんでやねん」なのか
世の中に対する違和感に、研究でツッコミを入れる

なんで「なんでやねん」やねん

以前からあった「卒業研究」は、2019年度から「卒業論文『なんでやねん』」となった。では、「なんでやねん」とは一体何か、もちろん幾才におけるツッコミである。ツッコミあって幾才の面白さは成立する。ボケ後の行動や言動は「ズレ」だ。このズレに対する「違和感」を否定・指摘するのがツッコミだ。したがって、ボケツッコミ→ボケツッコミ…が幾才の脚本の基本設計になる。中学70期の卒業論文『幾才はなぜ多様なのか』において、自ら制作した幾才の脚本を以下に引用する。

A. 突然なんやけど。
B. どないした?
A. コンビニって、もっと積極的に商品を売り出すべきやと思うねん。接客型コンビニってどう?
B. いや、今のままでええと思うけど。コンビニに接客はいらんて。
A. じゃあ試みに俺が接客型コンビニの店員やるわ、お前、お客さんやって。いらっしやいませー。
B. いや、聞けって、っていうかもう帰った。クイーン。
A. いらっしやいませ。こちらお席です。
B. **いらんわ**。コンビニで勝手にささいでくんよ。商品取りにくいやろ。
A. お前のだからもう一回やれよ。
B. **なんで俺やられてんの**。クイーン。
A. いらっしやいませ。何名様でしょうか。
B. 一人ですけど。
A. ドンマイ(笑)
B. 黙れ。
A. 私のおススメはオレンジジュースがお茶ですが。
B. あー、そういう接客する感じのコンビニな。じゃあオレンジジュースで。
A. そう思うと思いましたが。当店お茶のみしか置いてません。
B. **なんのおススメやねん**。お前の好み聞いてへんわ!
A. お茶目なコンビニだよな、お茶だけに。
B. **もうええわ**。



(一部省略。全読みたい人は図書館で借りてね)

どうでもいい話が授業をつくる / 題材を深める重要さ

楽しい時間をありがとうございました。まず同僚同士とこんなふうに話がし合えるというのが羨ましいなと思いました。また、テーマ(リサーチクエッション)ではなく、題材に時間をかけるというところに納得しました。強い違和感や憤りがあるならまだしも、題材を深めずして問いは生まれてこない(立てられない)というのは、当たり前のことだなと感じました。(中学校社会科)

※実はこの春に片岡は清教学園を退職してしまい、こうしたおしゃべりができなくなってしまったのです。それでは寂しいから、この「ひろば」を立ち上げた('◇')。と、ともいえなくもありません。とはいえ本来はもっともっとくだらない話が(おもに片岡からの…)多いのですが、ゲストがたくさんいらっしやるので、大変よそ行きの話になっております。「くだらない方がいいな〜」と言っただけならばくだらなくしますよー。(^^)/

★>同僚とこんなふうに

だいたいこのような形で司書室では喋ってます。仰る通り、ありがたい環境です。こうした「半分どうでもいいお喋り」みたいなものが、これまでも授業づくりのヒントになってきました。

>題材に時間をかける

そうですね。世の中皆さん悩んでいるテーマ(問い)というのは、フォーマットに当て嵌めれば形式的にできてしまうものなのです。問い作りのワークショップなど色々ありますが、「自己の在り方生き方」を問う探究学習だからこそ、生徒の動機を大事にしたいですね。



アーカイブ配信はじめました

第2回、家事で拝見することができず残念です。期間限定でもいいので、アーカイブを見たら嬉しいです。また、この取り組みについて、知り合いの学校司書・司書教諭さんにもお勧めしたいのですが、次回 Zoom の URL が掲載されたメールを転送してもよろしいでしょうか。(中高一貫校司書教諭) ※音声で聞けるようになると思います。編集してませんのでお聞き苦しい点をご容赦ください。もちろん転送かまいません。添付の PDF も一緒に送っていただけるとありがたいです。

★>期間限定でもいいのでアーカイブ

ちょうど公開資料をおいておく場所も欲しかったので、GoogleDrive で共有する形にしてみました。第1回・第2回とも配信中です。(→[アーカイブ配信/資料置き場](#)) どういう人が見ているのかは把握しておきたいので、上記 GoogleDrive の URL 共有は避けて頂き、柏原さんから送っている「[参加フォーラム](#)」を送って頂ければありがたいです。今後ともよろしくお願ひします。

問いはあとからできてくる

「問い立て」よりも、興味関心があるか、そしてそうした本に出会うかどうかが重要であるというお話(「問いはあとからできてくる」)が興味深かったです。(中等教育学校研究開発室・社会科)

※コメントありがとうございます。本に出会うまでの努力が教師側の労力のかかなりの半分以上なんでしょうね。振り出しに戻ることも結構(相当)ありますし…。

★学びの結果ではなく学ぶ経験それ自体が重要だという、探究学習のよさがもっと広がればいいなと思います。「私にとってこれが大事なのだ」と悩んで考えることが、生徒のオリジナリティを生みます。フレームワークで問いをつくって論文書いただけなら、誰がやっても似た学習になるという。

地域探究の難しさ / 図書館の本に付箋はアリ? / 進捗アンケートのつくり方(次回 30 分枠?)

今回も盛りだくさんの内容でありありがとうございました。たくさん刺激を受けました。貴重な機会でもありがたいです。おしみなく資料も共有頂きありがとうございました。連絡メールについては、何度分かれても問題ありません(こちらで対応できると思いますので、負担のないように進めて頂ければと思います。)

(感想)皆さんからの質問も、とても興味深かったです。時間など配慮頂きありがとうございます。また、前回要望した歴史に関するテーマを取り上げて頂き、ありがとうございます！

歴史が近年減少傾向にあること、男女比でも検証するなど興味深い話でした。本校では「幕末から明治維新(黒船襲来がなかったら、鎖国は終わっていなかったか)」「ヒトラーなど独裁政治(独裁者となる条件をまとめて現代日本で起こりうる可能性を検証したかったようですが、途中で挫折していました。面白そうなテーマなのに、最終的にはナチスがもたらした被害や独裁政治の仕組みまでの展開でまとめがなされて、ちょっと残念でした。レファレンスにもっと関われば良かったという反省もあります)」などが昨年度取り組んでいた探究テーマでした。

資料を探して読み込む活動を通して、動機が継続しそうなものを見つけて「問い」が最終的に立ち上がってくる話も、とても参考になりました。よい探究の類型やキャラクターの話と共に、教員にも共有したい話でした。自分もつい、問いをどうしたら立てられるかに注視していたように思います。気づきの多い会でした。書かせるより、付箋を貼らせる…ちょっと気持ち的にはヒヤッとしますが、何か特別な付箋でしょうか？のりのことが、やっぱり気がかりです。

(質問)地域のフィールドワークの話も少し出てきたので…探究を推進する分掌担当教員が視察した先で、地域テーマを探究する…となると、「地域の課題」を調べていくうちに、地域が嫌いになる可能性があると聞いたと話していたことが記憶にあたらしいです。過疎化が進み学校の統廃合も進んでいる地域だから出てくる課題感なのかな、とも感じますが。そんなものかな？と疑問に感じました。地域探究は、特に資料が一般書のように豊富にあるとは限らず、また〇〇誌など地域の歴史を調べる資料の中には、読解力が必要なものが多いと感じます。そのへんを探究したい子が出てきた時に、何か心がけていることや、揃える資料に工夫があれば教えてほしいです。また、どうやって資料を子ども達は取捨選択するのか、様子があれば聞かせてもらえたら助かります。ちなみに、本校(高1)では、地域の魅力を見つけるをテーマに今年度取り組むと聞いています。

(要望)進捗状況を把握するときに取っているというアンケートの項目を参考にして取組たいです。可能な範囲で詳細を教えてください。感想でも述べましたが、生徒はネット含め検索して出てこない情報は「ない」と判断して、質問にすら繋がっていません。この辺も抜本的にシステム構築(サイレントニーズを拾える仕組みがないこと)が先かな…と感じています。あとは、前回から出ているデモ検証もいつか聞いてみたいです。以上、公立高校・学校司書 長文になってしまったので、適宜修正頂いて構いません。(公立高校学校司書)

※どうも論文の形式になってから歴史の題材が減ってきたように思えます。歴史の中でテーマを設定して説得力のあるテーマを書こうとするとどうしても一次資料にあたらなければなりません。二次資料を使って歴史を俯瞰してまとめて差し出すならいわゆる調べる学習として楽しくなりますが、歴史の大きな問題を取り上げたとして正直なかなか手に負えないというのが実態なのかもしれません。ヒトラーで思い出したのは、高校生がかつて「ヒトラーについて学びたい」と言ったので歴史をはじめは学んでいましたが、かれの動機がヒトラーの演説だったことから、題材を演説にして、いい論文を作りました。独裁政治に興味があれば演説など小さな独裁政治の要素を取り上げてテーマにしていくのがいいのかもしれません。「大きな問いは砕く」「困難は分割する」ともいいますし。

小学校などでも「郷土」をメインテーマにするといった場合が見られますが、そのまま取り組むと苦戦は目に見えています。おっしゃるように資料がないのです。自治体発行の「私たちの〇〇市」みたいなもの以上では公共図書館の郷土資料ではかなり難易度の高い資料になります。まだ「〇〇市史」ならいいほうで、いきなり縄文遺跡発掘調査報告とか普通にあります。そこで私が皆さんに申し上げているのは「郷土や地域にあるものは何でもテーマになる」という枠の広げ方です。つまり地域にある郵便ポストでも電柱でも走る車でも河川でも自然でも道でも何でも自分が興味を持った事柄をまずは一般的知識として調べてみて。それを地域の視点を含めて考えてみるという作戦です。その方が子どもの興味と地域との接点が多くなるからです。とはいえ、やはりそれでも興味のある事柄を見つけるのは大変だろうなと感じてはいます。で、ご質問ですが関心を持ったのなら地域の方にお便り差し上げてはどうでしょう。市役所の担当部署はそうした人脈があるので紹介してもらえるかもしれません。ちなみに5月から住むことになった神奈川県藤沢市は、米軍キャンプから流れ出るPFOSで引地川という近所の河川が汚染されていて、これこそ「地域の課題」ですが、考えるだに気が重くなります。

アンケート項目は山崎さんが教えてくれるはずですが(丸投げ)('◇')も まだまとめてません面白データ「イケてる度」を取っていて、分析するつもりです。

★素人が手弁当でやってるので至らない点をご容赦くださいm(__)m その代わりに、有料化の予定は一切ありませんのでご安心を！

我々も、皆さんからの質問や、勤務校での探究や図書館の様子を伺えて楽しくやっています。明治維新も独裁政治も面白そうですね。「歴史のifは検証できない」とは生徒に言っています。誰にもわからず、検証のしようがないからです。好きなように空想を述べて終わり、というのも成果物として評価が難しいですね。とはいえ過去の歴史からそうした政治体制が発生しやすい土壌のようなものは、考えたりします。時間がなかったのか、モチベーションが下がっちゃったのかはわかりませんが、政治体制まで言及しているとさらにいいものになったかもしれないですね。昨年の中3にも、「ナチス体制下の大衆にはなぜ『意志』がなかったか」みたいな壮大なテーマを掲げた生徒がいました。よく読みましたが、実力不足で終わりました。やりたかったのなら、そんなもんで良いのかなと思います。

>書かせるより、付箋を

すみません、ちょっと勘違いさせてしまう伝え方になったかも。書いてもいます。半年ほどは手書きノートみっちりという感じです。しっかり読んで、しっかり考えてもらうためには、やはり手書きノート作成が一番です。

それに加えて付箋も貼るように言ってます。付箋の使用は司書界限では御法度ですが、本校ではむしろ推奨していて、それどころか授業では無料配布しています。糊も特殊なものではないです。机間巡視で付箋を全然貼れていない生徒がいると、「全然読んでないならテーマ変える？」と促すことも多いです。

我々が図書館員でありながら付箋使用を促す理由は二つあって、ひとつは学校図書館の本は使用・活用が第一の役割と考えるからです。アーカイブも目的の一つである公共とは役割が違う。研究の本は漫然と眺めてもダメ、能

「文献調査」2つの勉強方法

文献調査	
付箋を貼りながら読む	ノートをとる
<ul style="list-style-type: none"> 教科書の代わりの「参考文献」 付箋を貼りながら本を読む 本と対話する。面白く読む 本探しは図書館でも相談する 感動詞のない読書はやっても無駄 	<ul style="list-style-type: none"> 理解を深める「研究ノート」 付箋を貼った場所をまとめる 箇条書き、要約、図説、表… 疑問、反論、数値、実験… 著者の意見と自分の意見を分ける



動的(って言うのが正しいかはわかりませんが)に読まないダメとも言っていて、そうした読書のきっかけが「付箋をはる」「ノートにまとめる」なんですね。本当は自分で買って書き込んでほしいくらいです。授業者としても、付箋をたくさん貼れている状況は、その生徒の学習状況やモチベーションを表すバロメーターになります。その結果として、仮に汚損・破損・除籍になったとしても、それは「生徒の探究学習に供され、立派に役目を終えた」ということで、新しく買えばいいと思っています。

二つ目は学校図書館における本の寿命と、廃棄の関係です。歴史関係の本の廃棄について質問を下された方が他におられました。他の多くの分野でも学校図書館の本は、10年過ぎると廃棄が視野に入ってきます。となると、10年くらいの探究学習での耐用に、付箋使用が耐えられるかどうかでリスクを考えればいい。ちょうど、山崎が清教学園に勤めて10年です。この10年間で、付箋使用が理由での汚損・破損・除籍は一冊もありませんでした。実情はそういうものだという事です。

とはいえ各館の予算や考え方それぞれなので、何を重視するかはそれぞれの現場での判断になります。本校の場合はスタッフ全員一致で、付箋については上記のような考え方をしています。

>アンケート項目

もちろんです！公開するのでいいように使ってください。個人情報伏せた上で、生徒にどんなコメント返しをしているかもお見せできます。この「ひろば」コメントとほぼ同じ方法で、生徒へのコメント返しもしています。

途中抜け・流し聞きも歓迎。アーカイブ配信始めました

ありがとうございました。途中から拝見させていただきましたが、いろいろなお話が聞けてよかったです。曜日・時間は特に希望はありませんが、家事都合等もあるため可能な範囲で視聴をさせていただきたいと思います。なかなか意見を述べられるほどの活動ができていないのですが、きっと役に立つだろうと思っています。今後ともよろしく願いいたします。(私立高校学校司書)

※コメントありがとうございます。今度は8時半始まりになりますので、よろしく願いいたします。どうか気軽にお聞きください。

★GoogleDriveでのアーカイブ配信も始めてみました(→[アーカイブ配信/資料置き場](#))お忙しい中での視聴だとは思いますが、よかったら隙間時間にでもぜひ。学校の状況は各校それぞれだと思います。聞くだけでもお気軽に。一人職場の方も多いと思うので、そういった現場に立っておられる方が元気出す機会になればとも思っています。

著者や研究者など専門家に取材するときのポイント

テーマ決め、揃えておく本、フィールドワークなど、すべてが経験に基づく貴重なお話でした。ありがとうございました。著者や研究者に会いに行く時に気をつけたいことを具体的に教えていただけると嬉しいです。(中学校学校司書)

※テキストの4章だったか「現場に立つ」を読んでいただければ粗々おわかりになれるかもしれません。その一方で、ごく簡単に言えば興味を持った題材で「熱い」手紙を書くのが否決といえれば秘訣でしょうか。書かされた手紙だけは出さないようにしたいです。

★公開しているテキスト→(授業テキスト)p.70に、「どうやって現場から学ぶか：フィールドワークの技法」というタイトルのページがあるのでご参考に。この手法は既に色んな学校が真似するようになりましたが、大事なのは「ちゃんと生徒が興味を持っていること」「手紙の添削や面談は丁寧に」「相手の著作はちゃんと読む」「しょーもない質問しかできないなら時期尚早」の4点です。大学の先生、やる気のない&勉強不足の中高生からの依頼でけっこう困っているようです。

授業と興味のどちらも大事 / 自館蔵書の把握

お話の中で、生徒達だけではなかなか探求が難しく、大人(先生方)が入る事で生徒が探求できている部分もある。(ニュアンス的にこんな感じだったと思いますが、違っていたらすみません)というお話がありました。だとすると、やはり資料提供する側の能力が問われるかと思います。

清教学園で参加されている先生方は、異動は無いのでしょうか?勤続は何年目になりますか?私の住む自治体では、最大5年で異動となります。自治体で必要書籍のリストが作成されているわけではないので、異動する度に蔵書の構成が変わります。なかなか清教学園の様なすばらしい蔵書構成にする事は、勤務年数や予算で難しいと思いますが、出来る範囲で近づけたいとおもいます。

お話を聞いていると、OPACを確認しなくても蔵書内容の把握が長けているなど感じますが、蔵書を把握する為にやっている事、本の受入れから生徒に提供する迄の流れ(どの段階で目次や索引等から書籍情報を、どの様に把握していくのか)など、教えていただきたいです。

探求は、テーマ決めやテーマに重きを置いていない。本人の興味や動機が重要という部分に納得です。世界平和、環境破壊など大きなテーマに対する蔵書はあるが、それを自分毎として考える資料の少なさが当校は課題なのかな?と感じました。(公立中学校学校司書)

※そうですね。授業という枠があって「探究はじめますよ応援しますよ」と言わないとなかなか生徒も面倒な探究学習を始めようというふうにはならないと思います。好奇心があって自分の興味に素直で普段から探究している子は少ないですね。それだからこそ、「君が関心を持った世界にはこんなすてきな先輩がいてこんな本があるよ」と本を手渡して探究が始まる例が多いのでしょうか。

私学の移動は原則ないのです(チェーン化した私学はわかりません)。科目(まれに教科)の変更はありますが学校図書館は一貫して資料が蓄積されています。とはいえ『なんでも学べる学校図書館』を以前作ったのは、そうした生徒の興味に応じた蔵書を安価・短時間で組織するためのツールになると思ったからです。もちろん探究学習大全もそのつもりです。中学生の興味はそれほど多様ではない、というのが私の見解ですから、自治体が普通に予算配分すればどんな学校でも基礎的な資料は何とかなると考えたいです。

★>大人が入ることで生徒が探究できている

その通りだと思います。「授業」が持つ力は大きいです。よく「動機付け」について考えていて、それが外発的であるべきか、内発的であるべきか、みたいなことを思いますが、どちらも生徒にとっては必要なのだろうなど。論文書くよ、締め切りここだよ、という外発的な動機付けも。あるいは、このテーマで勉強したい、面白いからといった内発的なものも。両輪だと思いますし、それが成立する場所が「学校の授業」なのだろうなども。中学生が授業で、高校生は有志で論文を書いています、成果物を

残せるのは前者が9割、後者が3割です。そしてそうした割合に寄与するのが、蔵書構成やレファレンスなのだと思います。

>OPACを確認しなくても蔵書内容の把握が長けている

公立校司書の先生ともよく話しますが、雇用条件も移動も大変な中でよりよくされていこうというご苦労を察します。蔵書内容の把握は、レファレンス対応がかなり多いことが理由の一つです。中3の卒論はもちろん、高校生も含めると週のコマ数あたりの図書館利用率が94%なので、一日中何かしらの授業でレファレンスしてます。僕自身が、大阪市内のかなり忙しい公共図書館に勤めた経験から実感するのですが、レファレンス件数はたぶん、国内のあらゆる図書館の中でも上位に入ると思います。カウントできないくらい。そうした中で場数を踏むので、必然的に蔵書についてはわかっていきます。

加えて、ノンフィクションの受け入れ業務は生徒の研究テーマを見て発注、司書室で見計らいして選書、登録はMARC記載の学習件名に頼らず、内容を読みながらオリジナル件名をつけます(1冊あたり数十件とか入れます)。こうした受入れの流れがあるので、新刊の内容にふれる機会も多いです。とはいえ、教学的な仕事が8割以上を占める我々3人の授業者では、事務職としての司書業務が9割以上の上河先生(学校司書)には及ばないですね。フロアワークに割く時間も全然違うので、やっぱり蔵書の把握や資料サーチの精度は学校司書に分があります。

ミニ調べる学習

前回の質問へ丁寧な回答をありがとうございました。「単元の知識概念習得」を目的にすると、生徒の興味に発する探究が成立しにくい、というお話に納得しました。片岡先生の回答にあった「ミニ調べる学習の様子を紹介したプリント」を、ぜひ拝見したいのですが、可能でしょうか？(高校・学校司書)(公立高校学校司書)

※メンバーが自由にみられるフォルダがあるのでそこに入れます。って「探究学習大全」の共有フォルダでよかったっけ？(山崎さんへ)「ミニ調べる学習実習高石市報告2020」というタイトルで高石市の司書の皆さんがミニ調べる学習をやったときの様子が報告されています。練習時間はだいたい2時間で、テーマ設定から簡単な発表までが済むように一応組み立てあります。時間小学校の学校図書館でも十分できます。90分の短縮バージョン「ミニミニ調べる学習」もあるんですよ。

★片岡先生、こちらに入れて下さい。ここから誰でも見られるようにしています。(→[アーカイブ配信/資料置き場](#))

楽しく学ぶのが先か、能力を身に着ける教育の目的が先か

今回は抜けたり戻ったりしつつも、最後まで拝聴することができて嬉しかったです。ありがとうございました。生徒自身が情報を収集し、それを整理・分析した上で自分の言葉でまとめて表現するという一連の学習活動は、まさに将来、様々な課題に主体的に向き合い、解決していくための土台となる力だと強く感じました。

自分自身の教育活動で感じていることは、子どもたちの生活経験の幅が狭いこと、語彙が限られていること、そして文章を記述する力が十分でないことです。読書に苦手意識を持つ子どもも少なくなく、

文章を正確に読み解き、理解することに困難を感じている様子も見受けられます。これらの力を少しでも育めるよう、日々試行錯誤を重ねているところです。

清教学園で実践されている調べ学習、手紙を書く活動、インタビューといった取り組みは、卒業論文という大きな目標に向けて、必要な力を段階的に育成されている素晴らしい事例だと感じ入りました。これらの活動を支え、生徒たちを導いていらっしゃる先生方のご尽力は計り知れないものがあるだろうと思えました。まとまりのない文章になってしまい申し訳ございません。お聞きしながらこんなことを考えていました。(小学校教諭)

※清教学園にも「読書に苦手意識」の生徒は少なくありません。感覚的に中学入学時に苦手な生徒はその後にも苦手、という場合が多そうです。「なぜだろう?」とずっと考えてきましたが、「苦手な子は苦手な本(文書)しか読まされてこなかったのではないか」と考えるようになりました。大事なのは子どもが読みたいと思えるような、そこそこいい本がさまざまに準備されていて、読みたい本を何かしら子どもが口にした時に、それなりに本を手渡せる人がいるという環境だと思うのです。そうすれば本なんて楽しいから読むに決まっています。それなら、読解力の基礎は自然と培われていくと思うのです。ふりかえって、卒業論文での「良い題材」が先回りできないように、「良い読書」も先回りができないんだと思います。先生があれこれ良い本を読ませたいという先生方の気持ちはわからないではないです。しかし、それがかえって子どもの興味や読解力をおざなりにする気がします。なぜ「良い本」を読ませたいかという、「こんな本を読んでいる子になって欲しい」という「子ども像」が先生の側にあるからです。すると、その像にかなう子とかなわない子が当然生まれます。そんな先生の考える、「良い本を読む子」になるための読書「指導」は、どうなのかな〜と常々思っています(だから言葉としては読書「支援」がじっくりきます)。

語彙についても、「これこれの漢字や言葉をこれこれの学年までに身に着ける」というめやすは必要かもしれません。しかし、それらの語彙を記憶し復習するには「楽しい読書」や「楽しい作文」「楽しい会話」といった使いこなしの場面が必要です(十分に読書している子とはとくに知っているかもしれませんが)。ですから言葉の習得に向けてひたすらドリルというのは、言語を身に着ける自然な道りではない。言葉を言葉として情報獲得や発信のために楽しく使うからこそ、そのあとから様々は諸力がついてくると考えたいです。いろいろ書きましたが、ようは豊かで楽しい読書の時期が小学校時代にあると素敵だと思うんですね(読書だけでなく直接経験もですけど)。

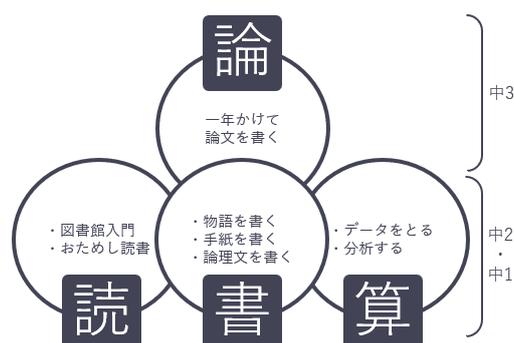
★アーカイブ配信もはじめたので(→[アーカイブ配信/資料置き場](#))、また空いた時間にぼちぼちお聞きいただければと思います。コメントからは様々に悩まれておられるのがよくわかりました。片岡先生の議論を引き継ぐと、楽しく学ぶのが先か、能力を身に着ける教育の目的が先か、という世の中の議論は、授業者にとって永遠のテーマなのかもしれません。本校の探究学習の場合は一貫して、片岡先生がおっしゃるように「何に興味があるの」「どんな本を読みたいの」という選択を生徒に委ねることを大事にしています。

残念ながら「面白いから読む」という当たり前の読書行為が、学校教育ではなかなか実現できません。小・中・高とずっとカリキュラムが事細かに規定されていることが大きな要因だと思います。ご自身が悩まれている言語活動に留まらず、学校図書館教育も同様です。「〇年生にはこの本を」「絵や写真のある本は禁止」「物語の世界が大事」「良書を渡すべき」…etc.そうした言説は教育の方向性とし

て一理ある一方、言い換えれば多分に「教育してやろう」「能力を伸ばしてやろう」という大人の意図を含みます。正直に言えば、そうした大人が求める「読む力」も「書く力」は、とやかく言わなくとも、がんじがらめのカリキュラムを作らずとも、「それが面白いから読みたい」「これを語りたいから書きたい」という動機が伴い、その動機を發揮する機会を保障すれば、たいがいの程度は身に着くと思っています。生徒の中で、いい本やいい文章へと自然と淘汰され洗練されていきます。本校の探究の授業で一貫しているのは、生徒自身の動機が伴う設計を必ず重視している点です。その仕組みを作っているだけです。流行りの「ループリック」も「めあて」もありません。自分でテーマを決めて学習する機会を保障するだけで、生徒は少なくとも目の前の文章や、Wordの画面に向き合おうとしている実感があります。

本校の授業カリキュラムも、確かにおっしゃるように段階的な能力育成のように見えます(図は2020年度のもの)。しかしそれは「〇年生で〇〇の力を身に着ける」というよりも、自分が読みたい本や、書きたい文章を考える機会を各学年で作ってきたというだけで、結果として3年生での論文作成や研究発表に必要な能力や技術が身についていた、という具合です。目の前の子どもがどんな固有性を持っていて、何に興味があるのか。読書でも探究学習でも、そうした固有性を見守ってあげる活動ができたらなと思います。

意見頂いた内容から少しずれてしまいましたが、教育における「手段と目的」「学習者と授業者の関係」「能力主義的教育観」といったテーマへと繋がる重要なトピックだと思います。ここ数年はそうしたテーマを扱う良書も、教育社会学や現代思想分野から多く出てきていて、僕自身もずーっと考えているネタです。いつかそうしたネタも配信で取り上げられたらいいなと思います。



問い(テーマ)は最後にできる

「問いが最後にできる」という言葉が、時間をかけて探究学習を積み重ねた学校の姿を表しているような気がして感慨深く感じました。調べてきたこと。たくさん調べてきたこと。本を読んできたこと。たくさん本を読んできたこと。学んできたこと。たくさん学んできたことの先に、あ、こういうことを聞いたかったんだと気づく。結論ありきで強引に問いに答えることが「探究」だと思っているのだとしたら、立ち止まって考えなくてはならないのだと考えさせられました。次回もよろしくお願いします。

(高等学校司書教諭・国語科)

★いつもありがとうございます。なんか僕も、卒論の授業を担当し始めた時に「問いを立てよう」「問い作りをやってみよう」的なことを授業で言っていた時期があって。その当時、片岡先生に「そんな急いで問い立てさせなくていいんだよ」と言われたことを、ふと思い出しました。たまたま Twitter で呟いてますが、問いが立つ、という状態も、國分功一郎がいうところの「中動態」的な状態なのだろうと。そしてそうした状態が成立する授業というのは、おそらく生徒を待てるようにできた授業なのだろうと。